

---

# おもいで

nyar

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

おもいで

### 【著者名】

Z5874C

### 【作者名】

nyar

### 【あらすじ】

ある世界史の授業。こなたは眠気に負けて寝てしまつ。そして、田を覚ましたら……

「授業始めるで～」

あの日の世界史の授業。

私はいつもの如く睡魔に襲われた。

あう…凄く眠いよ。

何でこんなに眠くなるんだろ？…

ここで私の意識は途絶えたと思つ。

た

なた

こなた

う～ん…

誰かが私を呼んでいる。

誰だろ？…

「こなた、起きなさい。」

「ふえ！？」

目が覚めたときは吃驚した。  
私にそつくりな人が目の前にいたのだ。

「夏休みだからって、いつまで寝てるのよ……。朝御飯出来る  
わよ、降りてらっしゃい」

その時私は悟った。

この人、私のお母さんだ。  
アルバムに載っていた写真と全く同じ。  
私にそつくりのお母さん。

そして今氣付いたことが一つ。  
私の体が……縮んでる?  
いや、時間が戻ったのか?  
そう……今の私は……

小学生低学年並みの身体になっていたのだ。

「あれ！？ なんで私……」

「 」あなた～早く降つてらひしゃこ

「あ、は～い」

おかしい。

何で死んだはずのお母さんがいるのか。  
なんで私は小学生に戻っているのか。  
今気付いたけど、ゆーちゃんもいない。

「 」なた、やつと起きたのか～

お父さんだ。

やつぱり今より若い。

一体どうなつてゐんだらひ、……

私、タイムスリップでもしたのかな?  
でも、そんなゲームみたいなことになんで……?

「早く食べましょ？」

お母さんが「 」しながり席に着く。  
とつあえず今は、過去に戻つたんだと想ねひ。  
考えるのは後からでも出来るから。

朝食も済ませ、部屋にあがる。

よくよく考えたらパソコンもない。

……当然か。

今私がいる時間は現代より10年も前。  
パソコンはそんなに普及していない。

「あ～…やめことがなくて退屈だな……」

私は青い空をずっと見上げたままボーッとしていた。  
そのまま何にもせずに夕方までずっと空を見続けていたら、いつの間にか眠っていて既に夕方になっていた。

「あ……この間はこんな時間に」

体を起こす。

長時間横になっていたと、何か体がだるい。  
ほつぺたをパチンと叩き、気合を入れる。  
すると、お母さんが「はん出来たわよ～」と言っていたので、  
下に降りた。

今日の晩御飯はカレーだった。

別に言う事もないと思うけど、美味しかった。

流石はお母さん……私が作ったのより遙かに美味しい……

## 次の用

私はいつも早く目が覚めた。

早く目が覚めても、ハンマーはないので過屈である。

と、あそびに山へ行はあるから、前中はお父さんと対戦した

午後からは退屈だつた。

お父さんは「ネタが降臨した」とか言って仕事部屋に引き籠もつたり……

「こなたー晩御飯よー」

私は身体を起こすと、一階へ降りた。

今田の晩御飯はお母さん特製、鶏大根である。

欲を駆り立てる。

その夜。

お母さん特製鶏大根を堪能した私は、再びベッドで「ゴロゴロ」してい

た。

いつまでもずっとじかにいられたら良いのに。

ずっとずっとお母さんといらされたら良いのに。  
どうして現実のお母さんは死んじゃったんだろう……  
考えれば考えるほど、悲しくなつてきたので私はやつれと寝ねじと  
にした。

次の日。

私の住む地域で祭りが開催されていた。  
元々インドアな私は行く気がしない。

でも、お母さんは突然皆で行こう。と言いました。

「賑わってるわね」

「そりゃあ祭りだしな」

「暑い～」

今日は凄く暑い日だつた。

そして、何故か連れまわされる私。  
楽しそうに笑うお母さん。

……シリヤ、一人の世界に入ってしまつてゐるよ。

「「」なた、金魚掬いやひつか」

「「つぐ、良こむ」

金魚すくこの前を通りたお父さんが言つ。

まあ、何もやらなによりかは楽しげだひつから私も参加する。  
ポイとボウルを渡され、捕れそうな金魚を探す。

「やつや、一匹あがつ～」

早くもお父さんせ一匹掬い上げた。せ…速一。

「えいっ… つてあれ～？」

「あ～ポイが破れちゃつた」

私との戦いでは苦戦していた。

掬いあげようとしても金魚は逃げるし、これは絶対にやるッ。と思つても紙が破れる。

「「つぐ… とれない～…」

「私も～…」

結局、私とお母さんは一匹もとれなかつた。  
お父さんは見事な腕前で十匹近くもとつていた。

「お父さん上手いね～」

「ふふん、口上と並ひやうのがあるのね」

「今度私たちにも教えてよ～」

「せう君だけ上手なのは納得出来ないもんね～

「ちよひと、なんだよ～納得出来ないこいつ～」

そんな話をしながら今田と並ひ口が終わつた。

今田も一匹が始まつた。

珍しく私は早起きをしていた。

時計を見ると午前4時。

空はほんのり明るい、清々しい朝だつた。

「あ～…早く起きすぎたな～また寝よ」

何分経過したのだろう。

……眠れない。

流石に起きたばかりでは、すぐには寝られない。

無理矢理寝るのもどうかと思つから、たまには早朝散歩こでも行きますとしますか。

ふと外に出ると、お母さんが立っていた。

「こなた、良い所へ連れてつてあげるわ。ついていらっしゃい

私はお母さんな連れられるまま、歩いた。

そこには今まで行つたことのない道だつた。

途中で坂道を登る。朝の散歩にしてはちょっとキツイ……

坂を登りきると、今度は脇道へと入つた。

そこには舗装などは一切されていない獸道だつた。

「こなたはね、そう君とよく見に行つてた所なのよ

田の前にままで朝日が登りつけてこる景色だった。

キラキラと輝く朝日は、下の方にある町々を照らしながら登っていく。  
く。

「凄いよね～……」

「うん……」

私はただ呆気にとらわれていた。

「」なた。今年は忘れられない夏になつたわね

「もうだね。一生忘れられないよ……」

「でも、人つていつかは忘れてしまつよね……良い思い出も、悪い思い出も」

私は何も喋らない。

お母さんが続けて話す。

「でも、忘れた思い出を思い出す」とも出来るよね。何かがキッカケになつて、それで思い出したり……だから、いつでも思い出せるように記念に一枚」

「あつがといとお母さんは、どこからかデジタルカメラを取り出した。  
あれ……何で持ってるんだ？」

「あらそろ時間ね……でも、こなたにもう一度会えてよかったです。  
樂しこ思い出が作れて」

「え……？」

「実は、神様に頼んだのよ。夢でも良いからもう一度こなたに会いたい。と」

「……そりだつたんだ」

「……こなた、あなたとござれたこの数日間。とっても樂しかったわ」

「私もだよお母さん」

「あつがとい」

カシャ

おぬせんはやつはつと、静かにシャッターを下ろした。

「むせむせ……おぬせん……」

「泉へこつまで寝とんのや」

「ソ

痛。

気が付くと、全てが元通りになつていた。

世界史の授業。

隣にはちょっと怒り気味の先生。

苦笑しているつかさとみゆきさん。

そして笑いが起きてる教室。

「よつぱど樂しい夢でも見とつたんやな～授業中ずっと寝てたもん  
な～後で職員室来いや～」

「はうう……」

その日の昼休み。

私は鞄の中に「デジタルカメラが入つていてのに気付く。  
電源を入れて、画像フォルダを覗いて見た。  
そこには……

「ハハハ」と笑っている、私とお母さんが笑っていた。

fin

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5874c/>

---

おもいで

2010年10月8日21時55分発行